

# みのおのおいたち その17

## 萱野地区(五)

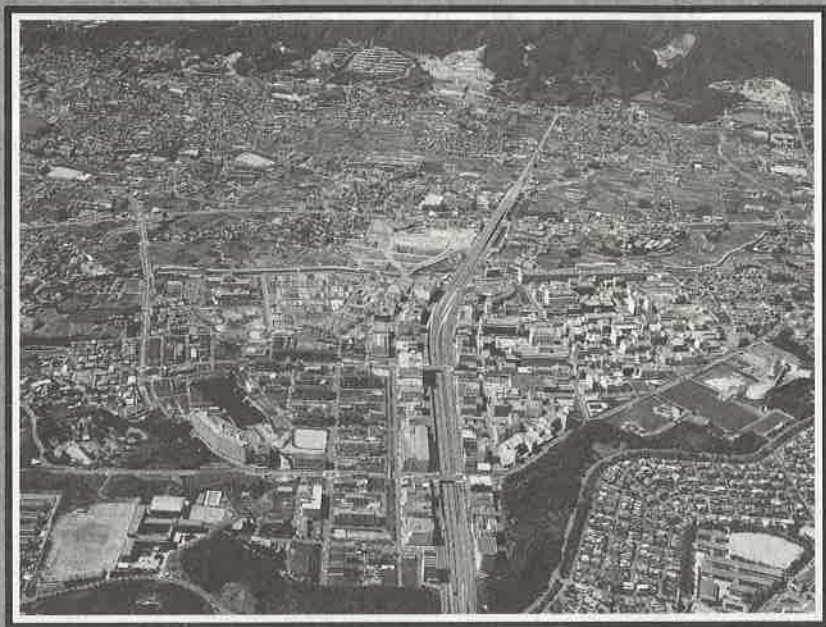


大宮寺が建てられた当時の萱野地区は「馱家郷」と言いました。地区の南部を通る古代の山陽道筋に「草野駅」が置かれて

いたことから地名でしよう。いつも馱馬一三頭が用意され、陸上交通の要地でした。

萱野地区は、やがて摂関家

おそらく交通の要地ということ。が藤原氏の目にとまったのでしよう。一二世紀に入ると、藤原氏は



原氏の荘園に取り込まれて垂水西牧(千里丘陵とその周辺の地域)に属することになり、郷名も「萱野郷」に変わりました。

垂水東・西牧の地を春日神社に寄進したので、それ以後は春日社領になりました。この春日神社は藤原氏一門の氏神であり、

今も各地で見られる春日社の多くは、このような歴史の中から現れたのでしよう。

萱野地区が春日社領になった平安時代末から鎌倉時代ごろの当地方では、山地に依存した林業による経済が発達しました。京都などの大都市に近く、交通の便利なこの地方では、材木が商品化されやすかったのでしよう。このことは勝尾寺の古文書が物語っています。

萱野郷民売木の事、見合すに随って取らるべく候由、方々沙汰人一同、下知を加え候。但郷民申す如くんば、市木を出さしめ候事、当郷一所に限らず、近隣村々その隠れなく候の処、萱野郷に限りかくの如くの御沙汰候条、別の子細候か。当時の萱野郷とその近隣村々では売木や市木が広く行われており、その商業的な行為は領主側が禁止していたようです。しかし、当地方の人々は、領主側の禁止にもかかわらず、ひたすら売木市木に励んでいたことが、この古文書からよくわかります。当地方で木材などが商品化さ

れ、大量の需要を生み出していたことは、村落や住民の経済的成長をもたらした反面、貧富の差を大きくすることに繋がったことでもしよう。しかし、また地域経済が発展したことから、住民の独立性が高まり、昔ながらの価値観や体制的な考え方を克服することにもつながったことでもしよう。こうした変化と動向の抑止策として、売木市木の禁令も出されたのでしよう。

事実、当時の萱野地区にいくつかの変化が見られます。その一つは、新しい村落と人名が登場してきたことです。勝尾寺文書には、石丸、西外院、伯、萱野、今宮、如意谷などが登場してきました。この村落を基盤にして力を伸ばしていた人々が、地域の発展の中心的存在となったのでしよう。地名を「名氏」にした萱野氏と如意谷氏は、その代表でもあります。古くは公領の馱家郷となり、やがて権門社寺の荘園となった萱野地区は、ここに中世社会Ⅱ農村の時代と言われる新時代を迎えました。